

12	11	10	9	8	7	6	5
33	33	40.5	43	33	40	33	41
17	17	17	17	14.5	15	15	15
17.5	17.5	14	18	17.5	16	17	17
4.5	4.5	4.5	4.5	4	4	4	4
41.5	43	42.5	45	42	42	42	42.5
6	5.5	6.5	6	6.5	6	7	6
36	37.5	37.5	39	33	38	36.5	39
11	13	12	12.5	12	12	11.5	12.5
21	22	21	22	22	23	21	20
29	30.5	29	32	31	30	30	30.5
9.5	10	9.5	10	9	10	9	10
7	8	8	7	6.5	7	6.5	7
23	23	27.5	30.5	29.5	28	28	28
19	11	10.5	11	10	10	9	10.5
5.5	6	6	5.5	5.5	6	5.5	6.5
17	17	16.5	19	16	17	16	16
15.5	14	14.5	15	14	15	14	15.5
6.5	5.5	6	6	5.5	5.5	6	5.5
♂	♂	♂	♂	♀	♂	♂	♀

右表に示す如く十二頭の標本中體形は雌雄に因り著しき差違を視す頭及胴の最長四三耗にして最小三八耗とす尾の最長一七耗にして最小一四耗とす下膊の最長四五耗最小四一五耗とす以上の如く各部の長短を十二頭に就て比較し見るに第九號の標本が大體に於て最大なるものとす

偕以上の形態を具ふる種は從來知られたる日本産蝙蝠類中にて見出されずドブソン氏の東洋蝙蝠類目録中 Emballonidae 科に隸する *Emballonura* 屬のものとして認めらる該目録には本屬中唯一種 *E. monticola* を記載せらる又同氏の英國博物館目録蝙蝠編には本屬に就て四種を記載す其檢索表を左に譯述して其孰れの種に相當すべき歟之を識別する考證となす

檢 索 表

(雜 錄) ○犬狸を哺育す

- (一) 鼻孔接近し圓孔尖端に開き上唇は多少下唇より挺出し下顎の門齒と牙齒と相隔離す……亞屬 *Emballonura*.
- (A) 耳珠内縁は窪み
- (1) 距骨脛骨より短く翅膜は脚蹠に附着す  
下膊骨一七吋…………… *E. semicaudata*.
- (B) 耳珠の内縁は脹み
- (2) 距骨脛骨より短く翅膜は足部に附着す  
下膊骨一四吋…………… *E. monticola*.
- (3) 距骨脛骨より長く翅膜は脚蹠に附着す  
下膊骨一五吋…………… *E. atrata*.
- (二) 鼻孔隔離し楕圓にて斜めに開孔し上唇前に挺出せず下顎門齒は牙齒の間に填充す…………… 亞屬 *Mosia*.
- (A) 耳珠の内縁は脹らむ
- (4) 距骨脛骨より短く翅膜は足の基部に附着す  
下膊骨一四五吋…………… *E. nigrescens*.

(波江元吉)

●犬狸を哺育す

先月中旬駒場農科大學林學教室の裏に飼養しある狸兒を見、其由來を聞くに、實に面白く、『イソツプ物語』にでもあらんと思はるゝ程なり。福岡の田舎に獵夫狸獵の

専門の牡犬を養へるが、今年初夏數兒を産せり。如何にせしや其子より母犬は離されたり。然るに不思議や數日にして狸兒の頭を銜へ來り哺育し、翌日はまた他のを持ち來り、二匹となり、三匹となり、遂に五匹に達し、之に乳を與へて愛育し居りたり。(臭氣を異にする異族の兒を己が兒の代りとせしは面白し。) 多分狸の母は獵夫の手にかゝり、只憐れなる嬰兒のみ彷徨し居りしを見つけたるならん。林學教授川瀬氏は、乳母と五匹の子を購求し、本年六月三十日より駒場にて飼養することとなりたる由。現今は既に乳を離れ、肉類等を食し愉快に生活し、人を恐れず、親犬は寧ろ小形のものにて黑白の斑あり、狸兒はよく稍斜なる樹枝を攀ぢ上る。

(谷津直秀)

### ●小きき材料のパラフィン埋藏便法

原蟲や海膽卵の様な小きき材料をパラフィンに埋藏しやうとする際、種々の液體を取替へる毎に少し宛流れ去つて遂には大多數を失つてしまふ。此の不幸を除くために接骨木の髓に浸み込ませて髓と一緒に埋藏するとか、谷津博士の紹介せられたハウアートの法(本誌第三一二號)とか、多くの工夫があるが、近頃ウェスト氏が雑誌 Science (No. 1068) にマイニル氏の膠製カプセルを用ゐる方法に改良を加へたのを掲げて居る。讀者の試みられん事を希望してその要領を記して置く。

膠製カプセルは水若くは薄い酒精に逢ふと容易に溶けてしまふ故、之を防ぐために先づ薄いシエラック液に浸して乾かしニスを施した状態にして置く。濃い酒精に逢ふ

とシエラックは流れ去るがカプセル其者は不溶解であるから容器として安全である。偕て前記の如くニスを施したカプセルの上端に近く一個、底部に近く一個の小きき孔を灼熱した針の先きであける。之は藥液が容易に入れ替るためである。

斯様に準備したカプセルに材料を容れたまゝで脱水からパラフィン迄の手續を進めるのであるが、材料を以前の容器からカプセルに移すには、細く尖らせた硝子棒の先にセロイデインの溶液(一二%)を着けて之に膠著せしめればよい。此の棒をカプセルに入れて靜に振れば材料は容易に少許のセロイデインと共に尖端から離れ落ちる。材料を容れたカプセルを順次に種々の液體に移しかへるには、カプセルを針金で縛り、之を管瓶の木栓の下面にブラ下る様にし、種々な濃さの酒精からキシロールを経て溶融パラフィン等の容れてある數個の管瓶に木栓と共に移してゆく。最後に材料が充分パラフィンに浸つた所で木栓を持つて引上げ、カプセルの口から靜かにピベットでパラフィンを流し近む、かの二個の小きき孔はパラフィンが冷えて直に塞がつて了ふ、さてカプセルは針金から外づし、水に投ずれば元來膠で出來て居るから直に溶けてなくなり、奇麗なパラフィンの圓壘形の塊が残る、その底にあたる端に材料が埋藏されてあるといふ事になる。若し材料が此の圓壘形のパラフィレ塊の最極端に集まつて居ると、此處は圓くなつて居る故連續切片を造るに